

ウィリアム・メイクピース・サッカレー（作）

「軍医補の恋女房」

松岡光治（訳）

何年か前、温泉地レミントンのロイヤル・ホテルに娘と一緒に足しげく通い、ギャム少佐夫人という名で通っている、いけ好かないアイルランド女性がいた。彼女の夫は大英帝国の軍務に服している名高い将校で、彼を打ち負かすことができたのは死神と彼自身の立派な妻だけであった。未亡人となった彼女は、調達できた中でもっとも見栄えのよい婦人用喪服を着て夫の死に哀悼の意を表し、自分勝手に友人と思っている貴族や紳士の屋敷を訪問した際に、少なくとも半インチはある黒枠つきの巨大な名刺を置いてきたそうである。

私たちの何人かはギャム少佐夫人のことを「^{ギャモン}欺瞞少佐夫人」と呼んでいた。この素敵な未亡人に性癖があるとするなら、それは自分と自分の一族（とはいえ、彼女は夫の一族を見くびっていたため、自分の方の一族）について、そしてアイルランドのメイヨー県にあるモロイヴィル邸という父方の屋敷の美しい景観について、大言壮語することであった。ギャム少佐夫人は同県のモロイ一族——私自身は今まで一度も聞いたことがない一族——の末裔であり、彼女自身が述べたことから、これがアイルランドのその地方でもっとも由緒ある傑出した一族であることに疑いはなかろう。そこへ、大きな赤い頬ひげを生やし、南京木綿のズボンをはき、緑の外套と馬鹿でかい飾りピンを身につけた若者が、伯母の

ギャム夫人に会いにやって来た。そして、この男は温泉地で二週間ほど滞在したあと、ミス・Sという女性に結婚を、それができなければ決闘を、彼女の父親に申し出た。ギャム少佐夫人は、^{かげ}鹿毛の馬と葦毛の馬の派手な二頭立て二輪馬車に乗ってきた甥っ子を、たいそう自慢げにモロイヴィル邸のキャッスルリー・モロイとして紹介していた。私たちはみな、その年の社交期において、この男がもっとも我満のならない俗物だという点で意見が一致していたので、彼を捕まえに執行吏がやって来た時は^{もろて}諸手を挙げて歓迎した。

さて、これがモロイヴィル邸について私が個人的に知っている全部である。実際、その屋敷内で寡婦のギャム夫人と会って、何か話をしようものなら、その一族の自慢話を必ず聞かされることになった。馬車が窓のそばを通ると、この欺瞞少佐夫人は「モロイヴィル邸にゃ馬車が三台、つまりバルーシュ型馬車、四輪軽馬車、幌つき荷馬車があるちゅうわけや」って必ず言っていた。同様に、この騒がしい御婦人は、その屋敷の下僕たちの数と名前をわざわざ聞かせてくれ、ウォリック城を参詣した時などは、城の近くを流れる川のそばの大きな散歩道なんか、モロイヴィル・パークの大きな並木道と比べると、お話にならないことを私たちに理解させようとした。ここだけの話だが、当時の私はある若いレディーにめろめろになっていた。その女性の父親、ジェフソン医師が同じロイヤル・ホテルに滞在していたので、私は彼の診察を受けていたのだが、ギャム夫人とその娘について詳しく話すことができるのは、そうした経緯があったからである。

先ほどギャム夫人が呼びかけていたジェマイマというのはもちろん彼女の娘のことだ。母親からは「ジェマイマ、私の最愛の子」とか、「ジェマイマ、神に祝福された子」とか、「ジェマイマ、私の姫君」とか呼ばれていた。そうした娘のためにギャム夫人が払った数々の犠牲は、彼女自身に言わせると、それはもうビックリ仰天ものだった。家庭教師に

費やした金、病気の娘にしてやった介護、母親としての筆舌に尽くしがたい愛——それらは神のみぞ知る、とギャン夫人はいつも言っていた。この母と娘は、部屋に入ってくる時はいつも互いの腰に腕をまわしていたし、夕食で出される料理の合間には、互いに手を組み合わせて座っていた。その場に若い男性が数名しかいないと、武夷紅茶が注がれている間に、彼女は娘に対して一度ならずキスをしたものだ。

ギャン嬢はどうかと言えば、美人ではなかったものの、公平を期して言えば、決して醜かったわけではなく、そのどちらでもなかった。額のあたりの長い巻き毛はヘアバンドで留められていた。彼女は歌を四曲ほど知っていたようだが、知り合って二ヶ月もすれば、それもかなり退屈なものに思えた。両肩を過度に露出させていて、たくさんの安っぽい装飾品、指輪、ブローチ、鎖の装身具、芳香塩フェロニエールを身につける習慣があり、こざい装いに努めているなあ、と私はいつも思ったものだ。もっとも、老リンクス夫人がそれとなく言っていたことであるが、彼女と母親の室内着は何度も裏返して作り直された形跡があり、靴下をかがって縫いすぎたあまり、娘の目は失明しかかっているとのことであった。

たしかに、ギャン嬢の目は充血して赤みがかり、視力も弱そうだったが、その場に適齢期の独身男性がいると、彼女は必ず大きな目玉をグルリとそちらに向けたものだった。しかし、たとえ未亡人の母親が舞踏会のすべてに会員登録しようとも、たとえ一頭立て貸し馬車を仕立ててキツネ狩りの集まりに出かけても、たとえ教会の礼拝にいつも出席して牧師以外の誰よりも大きな声でジェマイマに歌わせても、たとえ将来の幸せな夫になれそうな男をモロイヴィル邸に招いて三人の下僕、三人の庭師、三台の馬車を見せて喜ばせようとも、この娘に向こう見ずにもプロポーズするような英国紳士を見つけることはできなかった。過去八年間、ギャン夫人と娘はタンブリッジ、ハロゲート、ブライトン、ラムズゲート、チェルトナムに出没していた、と老リンクスがよく言っていた。だ

が、どの土地でも同じことで、幸運には巡り合えなかったようである。実際、この未亡人は神に祝福された娘にとって気位が高すぎるように思えた。大多数のアイルランド人たちと同じように、彼女は労働や商売で生計を立てている人間すべてを小馬鹿にしていた。さらに、彼女の活気に満ちた態度、衣装、アイルランドなまりの英語は、イングランドの静かな田舎の紳士たちの好みあまり合っていなかった。そのため、娘のジェマイマは（母には傷一つない花のように魅力的な女性に見えたが）未だに親の世話になっていたこともあって、多少しおれてしまった見すばらしい花に見えた。

さて、この頃のことであったが、第一二〇連隊がウィードン村に宿営しており、その部隊に伴ってハガティーという名の軍医補が来ていた。これは大柄だが、ぜい肉のない、頑丈な骨ばった男で、手が大きく、X脚で、赤毛の頬ひげを生やし、^{ランセット}切開刀を扱う外科の中ではもっとも正直そうな医者であった。ハガティーは、その名が示すように、まさにギャン夫人と同じ国の出身である。加えて、この正直者は未亡人に備わっている特質を持ち合わせており、彼女に負けず劣らず自分の一族について得意げに話していた。それがアイルランドのどの特定地域の首長であるかは知らないが、この国に何千もある一族の祖先と同様に、どこかの最高権力者だったのだろう。とはいえ、ダブリンではなかなか重要人物だったようである。ハガティーは、「そこじゃ、ぼくの父の知名度はウィリアム三世の像と同じくらいで、こう言っちゃ何だけど、自分の馬車をころがしてゐるんだぜ」と言っていた。

こうして、ハガティーは剽軽者たちから「馬車ころがし」と呼ばれるようになり、その中にはギャン夫人に「奥さま、フィッツウィリアム・スクウェアにあるモロイヴィルという町屋敷から中尉殿の舞踏会へ以前はよく行かれてたそうですが、その際は社交界で有名なハガティー医師とお会いになりましたでしょうか？」と質問する者がいたそうだ。

* * * * *

ところで、ディオニュシオス・ハガティーという軍医補は激しく燃え上がるタイプの男であった。その当時たまたま温泉地にいた病人たち、逗留者たち、ウォリックシャー州の若旦那衆、パーミンガムの若い工場主たち、兵舎の青年将校たちの中で、ギャム嬢の魅力的な容姿に少しでも悩殺された者がいたとすれば、はからずもそれは——二人にとって不幸なことに——他ならぬ軍医補であった。しかし、彼は恋愛に関しては経験が乏しく、実に控えめな男であった。それは彼が母親のギャム夫人をとんでもなく尊敬していたからで、彼のように善良で単純な男によくあるように、この未亡人の生まれや育ちが自分よりもはるかに良いことを彼は完全に認めていたのだと、はっきりと言っておく必要がある。キティ伯母さんから遺してもらった千ポンドが、しがない軍医補であるハガティーの全財産であった。それなのに、モロイ一族の者が身を落として、こんな男と結婚してくださるなどという、そんな期待がどうして持てるというのだ？

しかし、ある日のこと、ハガティーが恋愛で有頂天になっているという噂が連隊全体で広まっていた状況で、ケニルワース城でのピクニックで彼の恋心に火が着き、ワインという油を注がれた上に、いたずら好きな同僚たちに焚きつけられて、とうとう彼はギャム嬢に正式なプロポーズをしてしまった。

「ハガティーさん、お話の相手がモロイ家の者じゃゆうこと、認識しておってじゃね？」というのが、ジェマイマ嬢が胸をときめかせながらも、お決まりの手順に従って求婚者に「お母さま」の所へ行くように言ったあとで、お母さまのギャム夫人が威厳を正して彼にした返事であった。この母親が立ち去る際の視線には、哀れな男を完膚なきまでやっつける意図が見え隠れしていた。彼女は外套と婦人帽をサッと手に取り、

すかさず一頭立て貸し馬車を呼ぶように命じた。彼女は、「忌々しいカトリックの薬屋風情の小せがれが、厚かましゅうもウチの娘にプロポーズしてきたんよ」と、温泉地レミントンにいた独身男性の全員に言うことを忘れていなかった。実際、どの方面からプロポーズされようが、それ自体は害のないものであるが、母親から去り際にそう言われたハガティーは、ものすごく意気消沈して絶望状態に陥ってしまった。

事実、彼の気落ちした状態は連隊の内外で知人の多くを呆れさせたが、その理由は相手の若い女性が美人でも何でもなく、女資産家としても疑わしかったから、そしてデニスもまたロマンスと相容れない男であり、相手がどんなに魅力的な女性であれ、ピフテキやウィスキー・パンチの方がずっと好きな男のように見えたからである。

しかし、この恥ずかしがり屋で、垢ぬけない、もっさりした男が、アポローンのようにハンサムな伊達男よりも熱い、誠実な心を内に秘めていたことは間違いのない。私自身は、なぜ男が恋に落ちるのか理解できないものの、この無骨者が惚れ込んだことには心から賛辞を贈るし、大好きになったのが何であれ誰であれ、一向に気にならない。それは、天然痘の感染や毛髪の色とまったく同じように、個人がコントロールできないことである。我々がみんな驚いたことに、軍医補ディオニュシオス・ハガティーの恋愛は真剣かつ深刻なものだった。私が聞いた話では、ある日のこと、彼は若い連隊旗手を切り盛り用の大きなナイフで殺しそうになったそうで、それは欺瞞少佐夫人とジェマイマが途方もなく大きな庭園で三人の庭師、三台の馬車、三人の下僕、そして幌つき荷馬車に囲まれている諷刺画を、この男から描かれたためである。ハガティーにとって彼女たちに関する冗談は絶対に許せないことだった。彼は不機嫌でケンカ腰になり、連隊の食事仲間といえるよりも、しばらくは連隊の診療所や病院にいる方が長くなった。そんなこともあって、彼は大量のビーフやプディングを摂取しなくなってしまった——以前は、そうした飲食

物をしこたま素早く収納することのできる胃の持ち主であったのだが。その時までは、食事の後片づけが終わると、大きなコップで十何杯もの酒を飲んで実にひどい、しゃがれた叫び声でアイルランド民謡を歌っていたものだが、今ではそのまま自分の部屋に引き下がるか、陰気な顔で兵舎の中庭をゆっくり行ったり来たりするか、ジェマイマが（姿を見せないものの）住み続けていると思われるレミントンまで行く途中で、借りてきた雌馬を気が狂ったように^{むち}鞭で打ったり、拍車をかけたりしていた。

温泉地レミントンに足しげく通っていた若い人たちが引き上げてしまったことで、当地の社交シーズンは終わりを迎え、後家のギャム夫人も一年の残りの期間はいつもの住まいに退却した。その住まいが一体全体どこにあるのか、私たちに尋ねる権利はない。彼女はモロイヴィル邸の兄と仲たがいしていたし、さらにはプライドが高くて誰の厄介にもなりたがらなかったからである。

ギャム夫人がレミントンを離れただけでなく、その後すぐ第一二〇連隊も出発命令を受けてウィードンとウォリックから去ってしまった。この頃にはハガティーの失恋による食欲不振も多少は回復していたが、彼の恋愛はまったく進展がなく、彼自身も陰鬱でむっつりした気分のままだった。この時期に彼は自分の不幸な恋愛に関する詩を何篇か書いていたようである。それはある程度の長さの熱狂的な一連の詩で、一枚の紙に書かれていたのだが、筆跡によって彼自身の作であることが判明した。^{ビッチ・プラスター}それは樹脂膏薬を塗って包んだ紙で、部隊付きの副官を兼ねるフィーザー中尉が風邪のために装着していたものである。

それから三年後、ハガティーの知り合い全員が公共の新聞で次のような告知文を読んだ時の驚きたるや、想像を絶するものだった。

「本月一二日、帝国第一二〇歩兵連隊のディオニュシオス・ハガティー殿は、英国海兵隊の亡きランスロット・ギャム少佐の娘で、メイヨー県

モロイヴィル邸の先代のバーク・ボドキン・ブレイク・モロイ殿の孫娘で、当主のモロイ殿の姪にあたるジェマイマ・アメリア・ウィルヘルミナ・モロイとモンクスタウンにて結婚の儀を執り行う」

「誠の愛の道はついに平坦になり始めたか？」と、私は新聞を置きながら思った。過ぎ去った昔のこと、流し目をしながら自慢ばかりしていた未亡人、その娘の怒り肩、第一二〇連隊との楽しい日々、ジェフソン医師の一頭立て遊覧馬車、ウォリックシャー州でのキツネ狩り、そしてルイーザ・Sのこと——いや、彼女のことは放念されたし——それらが私の心によみがえってきた。あの善良で単純なハガティーはついに見返りを得たのであろうか？ まあ、彼は義理の母と結婚するわけではないので、十分うまくやって行けるだろう。

それからもう一年後、軍医補ハガティーの第一二〇連隊からの退役が公表された。彼の後任はスコットランド人と思われるアンガス・ロスセイという軍医補であった。その男は私と面識もなければ、この取るに足らない物語ともまったく関係がない。

* * * * *

さらに長い年月が経過した。その間ずっと私はハガティーとその恋女房の運命について注視していたわけではない。というのも、本当のことを言えば、ある日まで二人のことは一瞬たりとも考えたことがなかったからだ。そのある日とは、私がダブリン近くのキングスタンで浜辺をぶらぶらしながら、そこの海水浴場にいる人たちのほとんどがするように、ハウスの丘をじっと見つめていたら、やせ衰えた背の高い男がこちらにやって来るのが見えた日のことである。その男のモジャモジャの赤い頬ひげについては、ずいぶん前に似たようなものを見た気がしたが、その顔はハガティーのそれ以外の何ものでもなかった。最後に会った時から

十年が過ぎていたが、ハガティーの顔は年齢以上にいかめしく、やせこけていた。片方の肩にかつがれて汚いタータンの服を着ていた坊やは、使い古した黒の羽飾りの下から父親そっくりの顔をのぞかせている。ハガティーは反対の手で薄緑の手押し車を引いており、そこには二歳くらい女の子が乗っている。二人とも声を限りに泣き叫んでいた。

私の顔を見るや否や、デニスの顔の特徴である当惑したような沈んだ表情が消えた。彼は片方の手から手押し車の棒を、もう片方の手から息子を離してしまった。私に挨拶するために飛びはねながらやって来たのはよいのだが、あとに残された彼の後継者は道端で泣き叫んでいた。

「うわーっ、フィッツ＝ブードルじゃないか？ ぼくのこと、憶えてないかね、フィッツ？ レミントンのことは？ 第一二〇連隊のデニス・ハガティーだよ。おい、モロイ、静かにせんか。金切声をあげるんじゃない。ジェマイマもだ、いいか。いやーっ、旧友の顔を見ると、ヒリヒリする目も直っちゃうな。太ったんじゃないか、フィッツ？ アイルランドは初めてかね？ ここは楽しいだろ？ 素晴らしいだろ？ さあ、はっきり言えよ」

すでに気づいていたが、アイルランド人のほとんどが投げかけてくる、このような母国の長所に関する質問に、私は相手の満足のいくような返事をしてやった。子供たちの泣き声も近くの露店のリンゴを買ってやることで収まったので、私はデニスと昔話をすることができた。「みんなが見とれてた美しい娘と結婚できて良かったなあ」と、私は言って彼を祝福し、「彼女と一緒になれて運がいい奴だ」とかなんとか付け加えた。しかし、彼の様子を見ると、運がいいとはとても思えなかった。彼のいでたちは古い灰色の帽子、古びた短いズボン、連隊のボタンがついた古いチョッキ、継ぎの当たった半長靴ブルーチャーターで、安楽な生活をしている人間が自慢して着るような代物ではなかった。

「あ～あ！」と彼はため息をつきながら、私の質問に答えた。「あの頃

とは時代がすっかり変わっちまったよ、フィッツ＝ブードル。妻は昔とはまったく違ってしまったんだ——君が知ってた美しい人とはね。おい、モロイ、超特急でママの所まで走って行って、英国紳士が食事にいらっしやるって、そう伝えるんだ。フィッツ、一緒に食事をしてくれるよね、もちのろんで？」

それで、ご相伴にあずかることにしたが、モロイ坊やは父親の命令に従うことを完全に拒み、知らない人の来訪を伝えようとしなかった。

「じゃ、ぼくが自分で伝えなくちゃならんな」と、ハガティーは苦笑しながら言った。「さあ、ちょうど食事の時間だ。ぼくのあばら家は百ヤードも離れちゃいない」

ということで、私たちは全員あばら家まで行列をなして進んで行った。それは一列半に並んだ平屋建ての一つで、家の前には小さな箱庭があり、たいていはそれぞれの側柱に大変結構な名前が書かれている。デニスの家の側柱には汚れた緑の銅板の上に「外科医ハガティー」という鮮やかな文字が読み取れた。これだけでは足りず、呼び出しベルの上の側柱にも、楕円形状のものに「ニュー・モロイヴィル」という文字が刻まれている。むろん、ベルは壊れており、箱庭というか、庭の通路は苔と雑草が生えて、見すばらしかった。中央の色あせた小さな地面を囲む形で、汚れた岩がいくつか装飾用に置かれており、ニュー・モロイヴィルの窓の大部分には衣服とボロ着が吊り下げられていた。家の直接の入り口は疲弊した靴の泥落としのそば——壊れた格子細工の下——にあって、しおれたツル植物がそこで上に伸びるのをやめてしまっている。

「小さいけど、居心地いいんだぜ、ここは」とハガティーが言った。「ぼくが案内するよ、フィッツ。帽子はそこの植木鉢に置いて、左に曲がって応接室に入ってくれたまえ」

タマネギの臭いと泥炭の煙が霧のように家全体に立ち込めており、食事の時間が近いことを示していた。ジュージューという音が聞こえてく

る台所では、女中が手に負えない三番目の子供の泣き声を静めようとしている。私たちが部屋に入ると、ハガティーの子供は三人ともギャン泣き状態であった。

「アンタなんか、デニス？」という鋭い声が、私の通された応接間の薄暗い片隅から、生々しく聞こえてきた。この部屋では、夕食のために汚いテーブル・クロスが敷かれ、何本かの黒ビールと冷たい羊の骨肉料理が、近くの倒れそうなグランド・ピアノの上に並べられていた。「いっつも遅いんよ、アンタ。ノーランの店から、ウィスキー、買って来かったんじゃろ？ ほーら、買うとらんじゃろが！」

「おまえ、今日は懐かしい友だちが一緒なんよ。ありあわせの料理と一緒に食べてもらおうと思うたんじゃ」

「いつ来てんかいね？」と奥さまが尋ねた。その返事に私はとても驚いた。彼女のすぐ前に立っていたからだ。

「ここにおってじゃあ、ジェマイマ」と、デニスは私の方を見ながら答えた。「フィッツ＝ブードルさんで。ウォリックシャーで会^あうたこと、憶えとらんかい、おまえ？」

「フィッツ＝ブードルさんじゃって！ お会いできて、ホンマに嬉しゅうございます」と彼女は言いながら立ち上がり、真心のこもったお辞儀をした。

ハガティー夫人は目が見えなくなっていたのである。

目が見えないだけでない。視力を失ったのは天然痘が原因であることも明らかだった。両目は包帯で縛られ、この病気の恐ろしい後遺症で顔は全体的に腫れ、傷跡が残って、ゆがんでいる。私たちが入室したとき、彼女は片隅で編物をしており、とても汚い部屋着をまといていた。彼女の私に対する声は夫に話しかけた際の声とはまったく違うものだった。夫にはアイルランドなまり丸出しで話しかけ、私にはすべての言語で一番いまわしいアイルランド英語で語りかけた。最大限の努力をして自分

の地方なまりを隠し、生粋のイングランド人のように、ゆっくりした上品な口調を装って話そうとしていたのだ。

「ア・イ・ル・ランドにや、もう長^{なが}うことおられますかのう？」と、この哀れな女性はそうしたなまりで尋ねた。「ひどう荒っぽい場所じゃ思うとっちゃるんじゃないですか、フィッツ＝ブードルさん？　ウチらとチビ助どもの所に来てもらって、肩肘^{サン・セレモニ}はらず食事の誘いも受けてもらうて、ホンマにありがたいことですけえ。アンタ、ワインを氷で冷やしてつかあさい。フィッツ＝ブードルさんは、こがな天気で体が溶けそうにあ^あち^ちち^ちのはずじゃけえ」

しばらく彼女はこのような丁寧な口調で会話を仕切っていた。彼女のある質問に対して、私は「全然お変わりないようですね」と答えざるを得なかった。実際には、今回の偶然の出会いがなければ、彼女だとは絶対に分からなかっただろう。彼女は意味ありげな態度でハガティーに地下室からワインを取ってくるように命じ、夫は自分の執事でもあるのだと私にささやいた。かわいそうに、彼は妻の意を汲んで、一ポンドのビフテキと二本のボトル・ワインを買うべく、居酒屋まで駆けて行った。

「おチビさんたちに、ジャガバタ、ここで食べさせなさるかね？」と、裸足の少女がドアの所から顔を突き出し、長い黒髪をなびかせながら尋ねた。

「育児室で食べさせんさい、エリザベス。ほいで、こっちに——ああ、もう！　エドワーズに早^{はや}う来るように言いんさいや！」

「料理女のことじゃろか、奥さま？」

「すぐ寄こしんさいって！」と、哀れを誘う奥さまは金切り声で言った。料理を炒める音がやみ、暑そうな顔をした別の女が姿を見せ、エプロンで額の汗を拭きながら、正真正銘のアイルランドなまりで用事は何かと尋ねた。

「ウチを連れて行きんさい、二階の化粧部屋まで、エドワーズ。こげ

な^き冴えん姿じゃ、フィッツ＝ブードルさんの前なんか、出らりやせんわ！」

「そげなこた一、ぜーったいできん！ 旦那さんが肉屋に行っとるけえ、台所の火を見とかにやいけんのじゃ！」

「馬鹿なこと、言いんさんな！ どがなことがあっても、ウチは行くけえな！」とハガティー夫人が大声で言ったので、エドワーズは諦めたような態度になり、エプロンで自分の腕と顔をもう一度こすってから、奥さまに腕を差しだし、二人は二階へと上がって行った。

その部屋に残された私は三十分ほど様々なことを考えていたが、やがて彼女が見栄えのしない肩を前と同じように^{あら}露わに見せたまま、黄ばんだ古いサテンの服を着て下に降りてきた。飾り立てた帽子を頭にかぶっていたが、ハガティー自身が選んでやったものに違いない。彼女は金、ザクロ石、真珠貝、模造金箔といった、あらゆる種類のネックレス、ブレスレット、イヤリングを装着していた。鼻を猛烈に刺激する^{じゃこう}麝香を持ち込んだので、部屋に漂っていたタマネギと泥炭の臭いが完全に追いやられてしまった。彼女は傷が残って悲惨な、角ばった、下品な顔の前で、黄色のレースで縁取った^{キャンブリック}上質金巾のハンカチを振っていた。

ハガティー夫人には人目を意識した優越感のような態度が見られた。それは、哀れなデニスがかかなり手間取ってテーブルに準備した実にひどい夕食と同じように、^{うの}鵜呑みにするわけにはいかない。彼女は私をモロイヴィル邸に招待したくてたまらないようで、「お会いできりゃあ、従兄もさぞかし喜ぶじゃろね」と言い、かつて彼女の母親がよく話していたように、お屋敷についての逸話をたくさん聞かせてくれた。さらに、デニスが妻の大好きなビフテキを切ってやったので、それを彼女はガツガツと食べ、テーブルにあった色々な強い酒をガブガブと飲んだ。「ウチら、アイルランドのレディーはみな、小^こまいグラスに入れたパンチが大好きなんよ」と、彼女が茶目っ気たっぷりに言ったので、デニス私は私

でさえ飲み込むのに少し苦労したような、強烈な湯割りグロッグを馬鹿でかい平底コップになみなみと彼女に注いでやった。彼女は、今までとても辛い思いをしたこと、いろいろと犠牲を払ったこと、結婚前はぜいたくな生活に慣れていたことなど、要するに数えきれないほど——レディーたちの中には自分の夫を悩ました時に誇張して話す傾向がある細君もいるが——話をしてくれた。

子供たちが二階から降りてくると、彼女は当然のごとく叱りつけ、いきなり追い出してしまった。ということで、彼女は途方もなく長い間そこに座っていたわけが、立ち去る際にコーヒーはこの部屋で飲むか、自分の私室にするか、どっちにするかと尋ねた。

「ああ、もちろん、ここで」とデニスは答えたが、かなり困惑した様子だった。一〇分ほどして麗しき奥さまはエドワーズに導かれて戻ってきたが、同時にコーヒーも出された。コーヒーのあと、デニスはフィッツ＝ブードルさんのために自慢の喉を披露してほしいと妻に頼んだ。「大好きな昔の歌をいくつか御要望みただからね」

「嘘じゃろ！ ホンマかいの？」と彼女は言うと、古いピアノの方へ意気揚々と進んで行き、金属線が震えるようなキーツという声で、私が十年前にレミントンで聞かされた素朴な短い曲をいくつか歌ってくれた。ハガティーは、彼女が歌っている間、椅子に身を投げだして嬉しそうに聴いていた。

デニスにとって音楽は神聖に思えた。彼が大喜びするのには別の理由があった。それは妻が歌ったあととはいつも上機嫌になったからである。彼は、奥さまが自分の私室に引き下がった一〇分の間に、私との談話の中でそうしたことをほめかしていた。それで、彼女が歌い終わるごとに、私たちは「ブラボー！」と叫んで、イヤというほど拍手したわけである。

以上が外科医ディオニュシオス・ハガティーとその妻の人生について

私が気づいたことだ。私は絶好の時に彼と遭遇したと思っている。というのは、その後も彼は私たちが一緒に過ごしたキングスタンでの楽しい夕べについて話してくれたし、私がそこでの接待にとっても満足したと今の今まで思い込んでくれたからだ。彼の内輪の経済状況は次のとおりだった。彼には軍隊の退職給が年に千ポンド、父親の遺族年金が百ポンドほどあった。彼の妻も母親から年六十ポンドをもらえることになっていたが、もちろん払ってもらったことは一度もない。医者としての業務はなかったものの、それはジェマイマと子供たちの世話に忙殺されていたからである。すでに見たように、彼は子供たちを洗ったり、着替えさせたり、外出や散歩をさせたり、手押し車に乗せたりしている。子守女を雇う余裕もなく、目が見えない妻をひとりにしておくこともできなかった。^{ほりゅう}蒲柳の質だったハガティー夫人は昼の一時過ぎまでベッドに寝ており、そこで朝食と温かい昼食をとっていた。彼の収入の五分の一は妻を車椅子に乗せて運ばせるのに費やされており、毎日その車椅子のそばにいて決まった時間だけ歩くのが彼の務めであった。そのあと夕食の時間になると、アイルランドに大勢いてハガティー夫人も心から崇拜していた在野の聖職者たちが集まり、あちこちで彼女を忍従と貞淑の鑑として称賛し、苦しみに耐える彼女のあっぱれな信心深さを^{かがみ}やたらほめたたえていた。まあ、^{たて}蓼食う虫も好き好きというわけだ。しかしながら、彼女が一家の犠牲者であるとは私にはとうてい思えなかった。

「ぼくとジェマイマが結婚した状況はどうだったかと言や」と、この興味深いトピックについての会話の続きの中で、デニスが私に言った。「君も想像できんほど、それほどロマンティックで感動的だったんだぜ。ウィードンにいたとき、あの娘がぼくにどんな印象を与えたか、君は見えて知つとるよね。ぼくが彼女に見とれちまって、彼女が歌う「アラビアの黒い瞳の乙女」という曲を聴いた最初の日から、彼女こそアラビアの黒い瞳の乙女だって——とは言っても、ねえ、彼女はシュロップシャー

州の生まれだから、実際はそうじゃないんだけど——そう思ったし、まさにその日の晩、友人のターニケットにもそう言ってやったんだよ。でもね、ぼくを幸せにしようが、はたまた不幸にしようが、一生そうしてしまいそうな女性に会った気がしたね。君も知つとるように、ぼくはケニルワースで彼女にプロポーズして拒絶されちゃって、もう少しでピストル自殺するところだったよ。いや、君は知っちゃいない。だって、そのことは誰にも話さなかったからね。けど、それに近いことをしたとは言えるぜ。そうせんかったのは、ぼくにとっちゃ非常にラッキーだった。なぜって——信じられるかい？——あの娘はずっと恋してたんだから、このぼくにさ」

「ホントかね？」と私は言ったが、当時のギャム嬢の恋愛はまったくもって風変りな形をとっていたことを思い出した。しかし、実際、たいていの女は恋をすると、それを隠蔽するものである。

「哀れなデニスに実はぞっこんほの字だったんだって」と、この立派な御仁は話を続けた。「そんなこと、誰が想像できるかね？　でもね、一番の権威筋から——今じゃ仲良しの彼女の母親から直に聞いたんだぜ。これは間違いない事実じゃって言われたんで、いつ、どうしてそうなったのか、今から君に話してやろうじゃないか——

* * * * *

ぼくたちは、ウィードンにいた三年後、コークに駐屯してたんだけど、それは本国にいた最後の年だった。だから、あの娘がほどなく声をかけてくれたのは神の恵みだったね。でなきゃ、今頃は別々の場所にいることだろうよ。で、ある日のこと、閲兵式から駐屯地まで行進していると、ある御婦人が真っ黒の喪服を着て、開いた窓の所に、病人らしき別の女性のそばに、座ってる姿が目に入ってきてね。その時だったよ——窓辺

の御婦人が金切り声で「こりゃ、こりゃあ！ あれ、見い！ 第一二〇連隊のハガティーさんじゃろ、ありゃ！」と叫んだのは。

「あの声、たしかに聞き覚えがあるぞ」って、ぼくは同僚のウィスカートンに言ったよ。

「あんまり聞き覚えなんかねえ方がいいぜ」と彼は答えたね。「ありゃ、欺瞞少佐夫人だぞ。横におる娘のために、婿さん探しとか何か、また画策してんだぞ、きっと。去年も同じ用件でバースにおったし、その前の年はチェルトナムにおいて、ぶったまげたことに、そこじゃ彼女の知名度は居酒屋の『めんどり&ひよこ』亭とどうこいどうこいだったそうぞ」

「ミス・ジェマイマ・ギヤムについちゃ、悪く言わんでくれたら嬉しいな」と、ぼくはウィスカートンに言ったよ。「彼女はアイルランドで最高の位にいる一門の末裔なんだから、前にプロポーズした女性の悪口を言われると、ぼく自身が言われとるみたい気になるからね——分かったかい？」

「じゃ、アイツと結婚しろよ、そうしたけりゃ」と、ウィスカートンは気色ばんで言ったね。「アイツと結婚して、くたばっちまえ！」

結婚しろだって！ そんなこと、考えただけで眩暈がして、元々そうだったけど、その時は千倍もイカれちまったよ——

当然と思うだろうが、その日の午後、心臓をドキドキさせながら、ぼくは闘兵場までの丘を登って、未亡人の家まで行ってきたよ。そりゃ今の家と同じように「ニュー・モロイヴィル」と呼ばれてた。六ヶ月間、どこの家に住もうが、彼女は「ニュー・モロイヴィル」と呼んでたんだ。そりゃマロウ、バンドン、スライゴー、キャッスルバー、ファーモイ、ドロイダ、その他、誰も知らんような場所でも同じだったよ。だがね、ブラインドが下ろされて、その後ろに誰かの姿が見えたと思うんだけど、哀れなデニー・ハガティーには気づいてもらえなかったのさ。で、ジェマイマを一目でも見ようと、ぼくは軍隊での食事中はずっと行ったり来

たりしてたんだけど、結局は徒労に終わっちまった。次の日もまた閩兵場へ行ってみたよ。これまでと同じように彼女に首ったけってわけさ。いいかい、そんなふうになったことなんか今まで一度もないんだ、ぼくは。いったん心をつかまれたら最後、ぼくって男は永遠にそうなるんだって分ったね——

どれだけ時間をかけて、ぼくなり探りを入れてみたか、君に話したって何にもなるまい。けどね、実際に家の中に入れてもらおうと——そりゃ、君もレミントンで会ってたから憶えとるだろうが、ボートの競技会でコークに来てからは、軍隊の食堂でよく一緒に食事をし、ぼくのことを大好きになってくれたキャッスルリー・モロイ君の仲介を通してだったんだけど——つまり、実際に家に入れてもらおうと、まあ、ぼくはイン・ミーディアス・レイス間髪入れず、すぐさま駆けだしちまったよ。落ち着いて行動できんかったんだ。胸がいっぱいだったからね——

ああ、フィッツ！ あん時のこたー、ぜーったい忘れられんよ——ほう応せつしつ接室はんないに案内された時のこたーね。

[デニスは、気持ちが揺れ始めると、それまで以上にアイルランドなまりがひどくなった。初めての人であっても二言、三言であれば理解できるし、記憶して再現できるかもしれないが、初めての人がアイルランド語で会話を続けるのはほとんど不可能なので、ここではデニスのなまりを真似る試みはすべてやめておこう]

母親のギャム夫人に会った時はね、急に自分の感情に打ちのめされちまって、マスコット銃の弾丸に当たったみたいに、ぼくは地面に倒れちやったよ。

「親愛なる奥さま、どうかジェマイマをぼくにください。それが無理なら、ぼくは死にます」

「ありゃまあ、ハガティーさん！」と彼女は答えたね。「^{おど}驚れえたわー！
キャッスルリー、ちいとウチら二人だけにしんさいや」と彼女が言うと、
甥っ子は葉巻に火をつけ、ぼくを床の上に倒れたままにして立ち去っち
まった。

「立ちんさいな、ハガティーさん」と奥さまは続けて言ったよ。「今み
てえに、藪から棒に訴えられても困るんじゃないけど、ウチの娘に対するア
ンタの忠誠心は、そりやもう感動的なもんじゃった。そがなこと、否定
する気はさらさらないんよ。おおかた、ジェマイマも似たような気持ち
じゃろう。ほいじゃが、何回も言うとするように、娘をカトリック教徒に
なんか、やるわけにやいかんのじゃ」

「ぼくは奥さまに負けず劣らず善良なプロテスタントです。母は相当
な財産を相続してますし、ぼくたちは全員、母の方針に従って育てられ
たんです」

「そがなことなら、話がまるっきり変わってくるわいのう」と、彼女
は白目をむきながら言ったよ。「ウチの聖なる娘がカトリック教徒なん
かと結婚する姿を見るんは、どう考えても良心が許さんのよ。そがな男
をモロイヴィル邸に受け入れるなんて、そりやできん話じゃのう。ほい
じゃが、この壁がなくなるんじゃないたら、もう若い二人の邪魔はせんよ。
これまででも、大事な娘のことが関わつとる時にや、いっつもそがいにし
てきたように、ウチは自分を犠牲にせんといけんのじゃ。ほいじゃあ、
かわいそうな、美しゅうて、優しゅうて、受難者みたいな娘に^お会うて、
アンタの運命を娘の口から直に聞いてもらおうや」

「受難者ですって、奥さま！ お嬢さま、具合いがお悪いんですか？」

「なんですと！ 聞いてられんのですか？」と未亡人は大声で言った
よ。「もちっとでウチから娘を引き離そうとした、あがな恐ろしい病氣
のことを知らんのんですか？ 九週間ですよ、ハガティーさん、ウチは
一睡もせず、昼も夜も娘のそばについたりしました——九週間ずっと、娘

は震えながら生死の境をさまよい続けとったんよ。医者にゃ八三ギニーも払ったんじゃよ。今は娘も回復しとるんじゃが、かつての美しい姿はもう跡形もないんですけえのう。苦しみ、それからたぶん別の失望が——それについちゃ今は申し上げられんのじゃが——娘をすっかり衰弱させてしもうたんです。ほいじゃあ、アンタにゃ、ここで待つとつてもろうて、思いがけん、まったく予期せんかった訪問じゃったけど、ウチの愛する娘にゃ支度をさせますけえの」

* * * * *

「かわいそうな受難者のジェマイマ！」とデニス・ハガティーは私に言った。「暗い部屋に座ってる彼女の所に案内されたあと、ぼくと彼女の間で起こったことについちゃ話さないでおこう。やつれちまった哀れな彼女の手を（手探りで搜したあと）つかんだ時に、ぼくがどんなに喜びで打ち震えたことか。そのことも詳しく説明するつもりはないよ。彼女が手を引っ込めることはなかったね。それで、部屋から出てくる時は、婚約者になってたんだぜ、ぼくたち。これでやっと、いつも心の底から彼女を愛してたって証拠を示すことができたよ。だって、三年前に求愛した時は、彼女のために遺書さえ作成してたからね。君に言ったように、あの日の晩は求婚を拒まれたんだ。ピストル自殺だってしかねない、ノン・コムボス精神異常になりかねない状態だったなあ。だけど、兄のミックが遺書に異議を唱えるといけないんで、ぼくは生きることにしたよ——ちゃんと普通に死ぬことで、彼女に恩恵が行くと思ってね。当時のぼくには千ポンドしかなかったけど、そのあと父がもう二千ポンドを遺してくれたんだ。一シリング残らず彼女に遺贈したことは想像にかたくあるまい。そのあと実際にしたように、結婚の時に彼女にすべて分与しちゃったよ。不幸に襲われた彼女の顔はしばらく見させてもらえなかったんで、恐ろ

しいことに彼女が何を失ったのか、ホントに分からなかった。あの美しい残骸を見た時のぼくの苦悩が、君、想像できるかい？……」

「その時のぼくはね、連隊の軍医に任命されることになってたんだ」と、デニス途切れた話の穂を継いだ。「今、連隊はジャマイカにいて、その海外派遣は結婚直後に命じられたんで、任命は駄目になっちゃった。妻がジャマイカ行きをどうしても承知してくれなくてね。ママを置いて行ったりすると、胸が張り裂けるって言ったのさ。それで、ぼくは除隊して退職給をもらい、この小さな家を手に入れたってわけだ。ひょっとして患者がぼくの所に来るようなことがあれば——まあ、ぼくの名前は真鍮の表札に書いてあるし、何があっても準備はできてるよ。でも、実際に今まで来た患者と言え、一度は妻を遊覧馬車に乗せてやってた日のことで、もう一度は頭を骨折した物もらいが来た晩だけだったけど。ところで、妻は毎年のように赤ちゃんを産んでくれてるんだぜ。ぼくは借金なんかしてないし、ここだけの話なんだけど、義理の母が家にいない時は、必要最低限は幸せになれるんだよ」

「何だって！ 君と老婦人はうまくやってないのかい？」

「何とも言えないな。馬が合わないんだ」と言って、デニスはかすかに歯を見せてニヤッと笑った。「義理の母が家にやって来ると、家の中がメチャクチャになっちゃうんだ。ここに彼女がいると、ぼくは食器洗い場で寝なくちゃならない。彼女は、まるでジェマイマのために我が身を滅ぼしたみたいに、自分を犠牲にしたことばかり吹聴してるけど、最初の年からずっと娘の財産所得は一度も払ってくれた試しがないんだ。おまけに、ここに彼女がいると決まって、モロイ家の連中、騎兵、歩兵、砲兵からなる一族が勢ぞろいして我が家に宿営しちゃってね、家計がピンチになるほど大食いする始末さ」

「じゃあ、あの後家さんが詳しく説明してたように、モロイヴィル邸はホントに立派な場所だったんだね？」と、私は少なからず興味を覚え、

笑いながら尋ねた。

「ああ、まったくもって広大で立派な場所さ！ 二百エーカーにも及ぶ樫の木の大家庭園があって、君が見たこともないような素晴らしい土地なんだけど、樹木はすべて伐採されちまってるよ。旧モロイ家の時代の園庭は西アイルランド随一のものだったって言われてるよ。お屋敷の窓の修繕のために、園庭のガラスはすべて持って行かれたみたいだけど、それもまた無理からぬことさ。地代として年に三千五百ポンドの収入があるんだけど、それは財産保全管理人たちに差し押さえられてるんだ。その他にも借金があるにはあるんだけど、土地は担保として設定されてないみたいだよ」

「君の義理の従兄のキャッスルリー・モロイだけど、彼は大きい遺産を相続しないのかい？」

「ああ、アイツなら実にうまくやって行くだろうよ」とデニスは答えた。「面目を施せる限りは、ケチケチする男じゃないからな。アイツのために手形に署名なんかするんじゃないかった。ホントに馬鹿なことをしたなあ、ぼくは。メイヨー県でアイツが捕まらなかったんで、このキングスタンでぼくが身を拘束されちまった。そのことで、かなりの大騒ぎになったんだぜ。ギャム夫人は何か言ってなかったかね？ ぼくが彼女の一族を破滅させてる——それだけのことだ、とか何とか？ 結局はぼくが借金を分割で払ってやったのに——ぼくの金はすべてジェマイマに財産授与しちゃったからね。キャッスルリーは律儀な奴で、できる限りの弁済をするって言ってきたよ。いずれにせよ、アイツにできることと言えば、せいぜいそれぐらいだけだね」

「もちろん、そうだろう。君たちは今でも友だちなんだね？」

「ああ、でもアイツは伯母さんとちょっとした言い争いをしてね。彼女のこと、メチャクチャ罵倒してたぜ。アイツが言うにはね、伯母さんはジェマイマを場所から場所へ連れまわし、イングランドのあらゆる独

身男性の前に、さあどうぞって投げ出したそうだ——かわいそうに、ぼくのジェマイマを、だよ。ずっとこのぼくのことを死ぬほど愛してたっていうのに！ 彼女の天然痘が治ったらすぐ——ファーモイでかかったんだけど——かわいそうな彼女の病気の看護のために、そばにいてあげたかったなあ。母親はキャッスルリーに「アンタ、兵舎に行って、第一二〇連隊が今どこにおるんか、軍隊リストで調べんさい」と言ったようだ。で、彼女は大急ぎでコークに駆けつけたみたいだ。病気の間にジェマイマは、ぼくに対する愛を激しい形で示したんで、それに圧倒されて母親も最後に約束したそうだよ——大事な我が子が回復したら、ぼくたちと一緒にさせてあげるってね。ぼくを追いかけて彼女はジャマイカまで行ってただろうって、キャッスルリーもそう言ってたぜ」

「そうしてただろうね、きっと」と私は答えた。

「それ以上の愛の証しがあると思うかい？」とデニスは大声で言った。「彼女の病気と恐ろしい失明のことだけど、もちろん健康と性格を害してしまったよ。あんなに社会的な地位の高い人が子供の世話なんかできっこないよ。だから、ぼくがいつも子供の世話することになってるんだ。たしかに彼女の気質にはむらがあるけど、感受性が強く、洗練されて、優雅な女性ってことは分かるよね。ぼくみたいな粗野な男の扱いに、彼女がしょっちゅう困ってる姿は、簡単に想像できるだろ？」

ここでデニスは、子供たちを散歩に連れだす時間だと言いながら、ぼくから離れて行った。彼がしてくれた話は、今から妻帯者になろうとする独身男性にとって、よく考えると有益な内容を含んでいるし、独身であることを嘆き悲しんでいる人たちの慰めになるかもしれない。紳士諸君、結婚したければ、そうするがよい。自宅の冷やした羊肉料理と毛巻き紙のために、快適な紳士クラブの食事を捨ててしまうがよい。読書や娯楽を諦め、自分の妻や子供を持つがよい。しかし、この忠告と実例に間違いなく従ってくれると思うが、最初にすべきことについては十分に

考えよ。恋愛問題に関する忠告はいつも有益である。普通の男であれば、いつも忠告を受け入れ、いつも自分の意見ではなく他人の意見に従い、いつも実例から教訓を得るものだ。美しい女性を見て、愛という非常に心地よい狂気に襲われても、いつもちゃんと立ち止まって、相手の気質、相手の資産、自分自身の資産について、つまり結婚生活を始めるのにふさわしいかどうか、判断すべきだ……ハッ、ハッ、ハッ！　こんな馬鹿なことを言うのはもうやめよう。これまで私はあらゆる階級と身分の女性に四三回も懸想^{けそう}してきたし、相手さえ許してくれれば、いつでも結婚していただろう。最大の賢者であったソロモン王は何回も妻をめとったではないか！　この話は私たちにとって「愛は最大の賢者でさえ支配してしまう」という警告にならないだろうか？　最大の賢者に公然と反論するのは愚か者だけである。

* * * * *

去年の六月、たまたま私はリッチモンドの快適な小さい退役施設にいた。そこのテラスで日光浴していたのは、なんと第一二〇連隊の我が旧友であった。老け込んで、やせっぽちになり、より哀れな、今まで見たこともないほど、みじめな姿になっていた。「何だ！　キングスタンの家はもう処分しちまったのか？」と、ぼくはデニス・ハガティーと握手しながら言った。

「ああ」と彼は答えた。

「それじゃ、奥さんと子供たちも、このリッチモンドにいるのかい？」

「いや」と、この哀れな男は言って、悲しそうに首を横に振った。その虚ろな目は涙であふれていた。

「うわーっ、デニー！　一体全体どうしたんだ？」と私は言った。彼が私の手を万力のように握り締めていたからだ。

「捨てられたんだあ！」と、彼は激しい悲しみによる恐ろしい叫び声——心の底から絞りだしたような物すごい悲鳴——を急に発した。「ぼくを捨てたんだぞ！」と彼は言いながら、椅子に腰を下ろし、大きな拳^{こぶし}を握り締め、細い両腕を激しく振っていた。「ぼくも今では賢くなったよ、フィッツ=ブードル。ジェマイマには逃げられてしまったけど、君は知ってるよね——どんなに彼女を愛してたか、どんなに二人とも幸せだったか！ 今じゃあ、ぼくのそばには誰もいやしない。じきに死んじまうよ、ぼくは。それも一つの慰めさ。最後の最後に、ぼくを殺すことになるのが、こともあろうに彼女になるなんて！」

狂ったように取り乱しながら嘆き悲しんで——冷静な我が国の男たちの間では見られないので、私も今は思い出したくないのだが——彼が説明した内容は、とても簡潔なものであった。義理の母が彼の家を占拠してしまい、彼を追いつ出してしまったのだ。彼の財産は結婚した時にすべて妻に授与されていた。妻は一度も彼を愛したことがなく、かんしゃくを起こして愚弄しながら、この事実を最後に伝えてから、身勝手にも彼をたたき出したのである。二人の男の子は死んでしまったが、女の子たちはモロイ家で彼にはできない立派な養育がなされたそうだ。それで、彼は天涯孤独の身となり、年四十ポンドの年金で生きている、というか死にかけていた。

彼の苦労も今頃はおそらく終わりを迎えたことだろう。その不幸の原因となった二人の愚かな女たちが、この彼についての物語を読むことは決してないだろう。彼女たちが神不在の物語など雑誌で読むことなんか絶対はない。誠実な読者の皆さん、願わくは皆さんが彼女たちのように教会の礼拝に出席されんことを！ こういった連中は、その宗教的な慣例のために邪悪なのではなく、それにもかかわらず邪悪なのである。彼女たちは愚かすぎて謙虚さがどういふものか理解できないし、もじゃもじゃ毛が生えた見苦しい胸の下に隠れたデニス・ハガティの優しい素

朴な心に気づかないほど、それほど物を見る目がないのだ。彼女たちは、ここにいる私の哀れな友に対する自分たちの行ないがすべて完全に正しいと、もっともキリスト教徒にふさわしい美德の証拠を示してやったのだと、そう思っているに違いない。ハガティの妻は友人たちから野蛮な夫の犠牲者だと、その母親は娘を救いに来た天使だと思われている。しかしながら、彼女たちがしたことと言えば、彼をだまして捨てたことだけである。この地上の愚か者たちは、自分たちに授けられている素晴らしい自己満足に安住し、彼に対する極悪非道さについては少しも良心の呵責を感じていない。おのれの薄情さについては傷ひとつない信心深さと高潔さを証明した結果として考えているのである。

【原典】

William Makepeace Thackeray, "Dennis Haggarty's Wife,"
Men's Wives (New York: D. Appleton, 1852).